

結核胸部疾患研究所の改称、改組について

京都大学胸部疾患研究所所長

大 島 駿 作

本年4月より、京都大学結核胸部疾患研究所が、京都大学胸部疾患研究所に改称されるとともに、従来7研究部門で構成されていた研究所が図のように4大研究部門(12分野)に改組された。この改称・改組は、すべて時代の変遷に伴う研究内容の進展と社会の要求に対応して実施されたものである。

本研究所の前身は、昭和16年に創設された京都帝国大学結核研究所であり、昭和42年に京都大学結核胸部疾患研究所と改称され、今日に至った。この間、結核症の研究に始まって次第に胸部疾患全体の研究に及ぶ一貫した研究の流れの中で、多くの優れた研究業績を発表し、人材を育成し、国内はもとより関連国際学会にも貢献してきた。

本研究所は、現在呼吸器を中心に、肺、心、縦隔、胸廓などの臓器・組織に発生する疾患の病因や病態について研究を行うとともに、これらの疾患に対する新しい診断技術や治療法についても研究を行っている。とくに肺は生命を維持するために不可欠の臓器であり、一度損傷を受けると組織のもと通りの再生・修復が期待し難い特殊な臓器である。この意味で肺疾患の研究は、生命維持や老化の予防にあたっては、心臓や脳の疾患とともに重要な研究と思われる。

一般に胸部疾患の種類は多く、呼吸器系を中心とした疾患の種類だけでも数百に及ぶが、個々の疾患の間に密接な関連性があることもまたその特徴の一つである。即ち、病因、病態の因果関係の面からも、診断・治療の面からも個々の疾患の研究方法に共通点が多いため、研究方法が高度かつ複雑化した現代においては、研究を1ヶ所にまとめて総合的に行うことが、胸部疾患の研究能率を向上させるためには必要である。われわれが現在研究対象としている疾患は結核を含む肺感染症の他に、慢性閉塞性肺疾患、気管支喘息、塵肺、過敏性肺臓炎、サルコイドーシス、肺線維症、肺癌などの多数の疾患があり、これらの疾患の発症機序、診断方法および治療法について研究するとともに、高度の肺機能検査や肺移植、あるいは人工肺の開発についても研究を行っている。

しかしながら、現実には呼吸器疾患研究の巾と深さが益々拡大を要求されているにも拘らず、研究要員の増加が極めて困難な状況であったため、本研究の将来を展望し、これに対処するためには、原則として現定数による改組を行い、共同研究を行い易い

体制に改組することが必要と考えられた。即ち、今回の改組の目的は、一つの研究テーマについて、それぞれの異なった知識と技術を有する研究者が、身近にあって、共同的、協調的に研究を行い易くすることであり、このためには、従来部門単位で比較的個々別々に行われていた研究者を再編成して、大枠での研究ブロックに集める研究体制に改める必要があった。このような理由から、今回環境生態学部門、生体防御部門、生体調節・再建学部門、細胞調節学部門の4大研究部門に改組したわけである。

今回の改組によって、従来に比して研究範囲が拡大した。即ち従来のように呼吸器に起った疾患を患者の側から研究するばかりでなく、患者のみならず人間の生活環境について、いわゆる外界の環境についても、呼吸器疾患の原因を探究しようとする環境呼吸器病学や、前述したようにヒトの老化と密接な関連を有する肺の老化の原因を調べる老化生物学のように、重要と分かっているにもかかわらず従来の研究体制の下では実施できなかった新しい研究を行うことができるようになった。

国際的にみても、わが国の医学研究は、どちらかといえば古い医学教育体制の基盤の上に立って行われているのが現状であり、このため、現在の先進諸国にみられる新しい研究テーマに対応した弾力的な研究組織の運用に比して旧態依然とした感がなくもなかった。われわれは今回の改組によって、呼吸器系の研究組織としては比較的釣合のとれた、国際的にも対応できる研究体制に一步近づいたものと思われ、その成果を期待している。

胸部疾患研究所の研究部門（主任教授）

環境生態学部門

人間環境学分野（客員分野）	糸川 嘉明
環境呼吸器病学分野*	大島 駿作
老化生物学分野	竹田 俊男

生体防衛学部門

感染・炎症学分野*	久世 文幸
免疫学分野	桂 義元
臨床免疫学分野*	泉 孝英

生体調節・再建学部門

臨床生理学分野*	久野 健志
胸部外科学分野*	人見 滋樹

補助臓器学分野

人見 滋樹（兼）

細胞調節学部門

分子病理学分野

鈴木 康弘

細胞生物学分野

永田 和宏

腫瘍学分野*

高橋 正治

*印は臨床分野